

## 寒梅の季節

松本永彦

立春もすぎたが厳しい寒さがつづくある休日、アパート近くの産婦人科から帰った妻の顔色がひどく青ざめているのに気付いた。

理容師として共稼ぎをしている私たちは、昨年の暮、妻が幾日もつづけて原因不明の気分の悪さを訴えていたのに、もしや妊娠かと思ったが、私にはどうにもしてやれぬ辛さがあった。

この職業の年末の十日間というものは、休日もなく、一年を通じて最高の稼

ぎ時で、戦場のような騒ぎなのである。多少の躰の不調ぐらいでは休む理由にはならなかった。まして他人の店に勤務している私たちには、すぐ病院で診察してもらおうようにとはいいいにくかったのである。

新春に入って間もなく、妻は近くの産婦人科に診察をうけにいった。その時は予期した通り妊娠を知らされた。もう四カ月になつていふ話だったが、妻の躰の記憶から考えると二カ月のはずで、どうも計算が合わなかった。その時、もう一月位したら詳しく調べてみるからまたくるようにいわれた。そこで今日、妻は再び診察をうけてきたのである。

「何といわれたと思う？」私の顔をみつめながら妻はいった。「大変なのよ。手術しなくては命にかかわるんですって」

そういわれて私は初めてうろたえた。

「もっと詳しく話してみろ」

私は不意に襲いかかってきた不安に妻をせかせかせた。妻はハンドバックを下げ、オーバーのまま部屋の中央に突っ立って話した。「お腹にはれものができ

ているんですって、子宮筋腫か卵巣膿腫ですってよ。お医者さんは一日でも早く手術しなさいって」

妻は早口にそれだけいうと、どつかりと畳の上にむくんだ足を投げだして座った。この思いがけない出来事に、私は自分の顔が緊張で強ばっているのが分った。私は本当に妻の躰にそうした危険な腫物ができていいのか、またすぐに手術しなければならぬのかもとはつきりした診断がほしかった。もしやそれが誤診であつたらそうした期待もあつた。

私は今すぐ手術ということになる場合、その費用のことがとつさに頭に浮んだのは事実だつた。私自身が健康で病院とか手術とかいう言葉が、今まで縁の遠いものにきこえたのに、現に妻が命にかかわるといつた言葉をもたらしたのは、何か苛々させ無駄な費用がかかるように思えた。一刻を争うこの場合にも、この吝嗇(りんしょく)じみた感じ方から抜けだせない自分に嫌悪をおぼえた。私は急いでアパートをとびだし、近くの雑貨屋で電話帳を借りると、都内の大病院をつぎつぎに呼びだした。その時刻は十時を半ばすぎている。幾つかの

大病院は外来の受付を締切っていた。私はやっとN産院が十一時半まで受け付けているという返事をとらえた。私はアパートに駆け戻ると、妻をうながして外出の用意をした。

「とにかくもう一度大きな病院で診てもらおうのだ。明日では駄目

だ。今日中に診てもらおう」

時刻は十一時に近づいていた。私たちは外にでると血眼でタクシーを探した。

N産院に滑りこんで受付に初診の申込書をだしたが、幸運なことにその日の最後の受け付けだったのである。

私は暖房のきいた待合所で妻が初診室のドアの中に消えるのを見送った。私は口の中が苦くなるまで煙草を吸った。

診察の結果はやはり卵巣膿腫だった。

「でも、今手術すると流産してしまうんですって、今は二ヶ月でしょ。四ヶ月になって胎盤がすっかりできてからの方がいいんですって」

妻は上気したような顔付きだったが、淡々とした平静な口調で報告した。

私にはこの病気がどんな種類のものかまるで見当がつかなかった。ただ得体の知れぬ無気味な腫瘍の想像が浮かんた。それは妻の命にかかわる危険さをはらんでいるのだった。

私はこうまで決つても、その二ヶ月の間に腫瘍が育ち、自然に破れて手術の必要がなくなるのを期待していたのだ。胎児が育ちその圧力で破れることもあるという話をきいていた。

私たちは結婚してまだ一年目だったが、将来独立して理髪店を経営したいという希望から、ガスも水道も共同というこの安アパートの四畳半に新婚生活を始め、そこから浮く僅かな金を独立資金にせつせと貯めていたのである。従つて子供も当分はうまない計画だったが、いつのまにか気が変わっていた。

私たちの貯蓄の乏しさに加えて、このアパートは子供が生めない契約になっていた。病院からアパートに帰ると、私はさつそく今後の具体策について妻と話し合おうとした。

「手術なんて嫌だなあ」

妻はのんびりした口調でいった。

「それより入院している間、別れ別れに暮らすのね。その方が辛いわ」

私が経費のことだとか、アパートの問題を考えているのに、妻はそんなことには関心がなく、自分の躰に加えられる手術の苦痛や、その時の生活の変化に心を奪われているようだった。

私は苛立たしい気持ちになって立ち上がると窓から外を眺めた。狭苦しいこの部屋も窓外は遙か遠方に広がって冬空の冷たい空気の下に雑然とした家並みや、そこかしこ樹木の群落が見渡せるのである。

しばらく心を押さえていると、急に空腹を覚えた。お互いに昼食を忘れているのに気付くと、私の気持ちも自然と和らいでいった。

結婚以来、こうした心の食い違いには慣れてはいたが、それでも感情が高ぶることがあった。そうした時、私は結婚によつて新たに得たものより、むしろ失ったもの大きさを考えることがあった。それまでの私は、自分の総ての行

為や結果は、自分で責任をもち始末をつければよかった。私はそうした個人的な生活が長く、かつそれに慣れすぎていた。いきおい私は自分中心に考える欠点を特に具えていたのだ。

つぎの休日から私たちは近くの不動産屋回りを始めた。例年のない寒い日々がつづいた。ある一坪ばかりの店の前にたたずんで、ドア一面に貼りめぐらされたアパートの物件をみていた。中で股を大きく開いてストロブに当たっている男と視線が合うと、彼は立ち上がってドアを開けた。

その不動産屋で紹介された家を私は以前から知っていた。この地域のS会という新興宗教のブロック長をしていた。

立派な門構えの母屋の横から裏庭を抜けると、北向きの六畳の離れで台所と便所がついていた。その家の主婦が私たちを案内して、家賃や権利金のことなどを説明した。私がふと赤ん坊のことにふれると、急に妙な笑いを浮かべて、子供ができる近くの子供を連れこむので庭が荒らされて困るという意味のことをいった。

帰途、私は妻に部屋に陽が当たらないとか、色々気乗りしない理由をのべたが、私の本心はあの主婦がS会の幹部だということにこだわっていた。私なりの解釈による慈悲の信仰と、実生活の利益追求の割り切り方に納得がいかなかった。妻にも私の気持ちがあつたらしく

「あのう、子供さん何人。これからお生まれになるのですか。どうぞ、どうぞ、結構ですよ。さぞお困りでしたでしょう。と、こうこなくちゃ」

妻はあの主婦の口調を真似た。私は思わず吹きだしたが、ふとある出来事を思い出すと、その笑いは消えてしまった。

いつだったか結婚して間もなく、ある夜私の古い友人が突然やってきて、ある新興宗教への入信を強要したのである。私にはその宗教が戦鬪的で世に聞こえているのを知っていたので、この友人が何度も猛烈な表現で入信を勧めるのを、こんなものかとそれほど驚くこともなかった。

私はまだ心が定まらず、集会にも出席する意志がないことを告げると、彼は私の将来の目的にふれて、入信することによって独立の希望がかなえられる。



もし信仰によらず現在の間違つた生活（つまりこの信仰によらない生活は総て誤つた生活だという）をつづけていると、逆縁といってよくないことが起こると強迫がましいことをいっただ。

私は私なりに宗教に対して一つの考えをいだいたのでその考えをのべたが、それは奇妙にどこまでも噛み合わず、彼の頭のとっぺんを滑りぬけてしまい、彼はラジオのように一人で喋りつづけた。

私が黙ってしまったても彼は際限なく私の内生活までも傷つけるのに我慢できずに、私は強い言葉で絶交を宣言してしまつたのである。

彼は帰りがけにアパートの入口で

「君はどうしてこう、素直な気持ちになれないのかなあ」

と一言もらして背を向けた。北風に逆らいオーバーの襟を立てて帰る彼の背後に、私は何か悲しみを感じた。私はどんな激しい折伏よりも、最後の一言の方が私の心に強くこたえたのである。

私がこの職業について、三四年苦勞して技術がやつと身についた頃、初めて職業の選択を誤ったことに気付いた。私の内向的な性格が接客を苦痛に感じるそのことは耐えられても、従業員は自分の店を持たねば家族を養つていけないという現実は無視できなかった。

地方出身で資金とてない私は、転職ということを経度も考えた。しかし、学歴もなく、なまじ一つの技術を覚えたということは、自然その技術への愛着を育ててしまっていた。

職業に徹することも、転職する決断もなく、私の心はいつも将来への不安や焦燥や孤独感で乱れていた。

その頃の私の生活は一人で音楽を聴きに行ったり、読み切れない位、本をやたらに買いこんだり、バーで酒を飲むことを覚えたりした。

そうした苦痛を逃れるため、私はよく空想にふけることが多かった。私の青年期は現実よりも空想によつて養われ育まれてきたようだった。架空の世界でのみ私には総てが可能であり、その時だけ無名の一理容従業員であることを忘

れていた。いわば空想は私にとって麻薬であった。

寝苦しい夜更け、狭い従業員室の片隅で布団に寝ころがりながら好んで偉人伝を読んだ。英雄ほど未来を夢見させるものはなかった。

— 暗い玉突屋の二階で読んだプルターク英雄伝 —

ふと想いだすフリーズであった。若く無名の青年士官であるナポレオンの野心や情熱は、乾き切ったわたしの心に吸いこまれた。そして疾風の如き戦勝や、恐るべき権勢は、私が無力であるが故に強く惹きつけるのだった。

しかし、こうした青春の感動も、反面私の意志をふるい立たせることもなく、私の未来には何の可能性もなく、ありふれた下積みの生活しか存在せぬことを諦念に似て感じていた。

だが、そうした私に思いがけない契機が近づいていたのだった。

その夏、業界紙主催の海水浴の集いに参加した時だった。海につき、私はギリつく海岸の光の下に何か憂鬱だった。途中の車酔いも原因したが、私はいつもこうした華麗な光の中で心が閉ざされてしまう経験があった。

私は仲間の青年たちが砂浜で西瓜割りやサイダー飲み競争のゲームに騒いでいるのに融けこむことができず、一人海で泳いでいた。

私は一人でいる時が最も解放されていることを感じた。反面、時として苦痛でもあった。疲れて私は昼食をとるため、だるい足を引きずって焼けつく砂上を歩いた。途中、ヨシズ小屋の前に一人の白い服の若い娘が一心に海をスケッチしていた。鏝の広い麦ワラ帽子の陰の白い顔は緊張した美しさがあった。私はこの附近の別荘の娘が遊びにきているものと思った。

私はその画帳を覗こうとしたが、何か気おくれがしてその横をすり抜けて通った。この娘の印象はいつまでも強く残った。

後、あるサークルで知り合った女性が、このときの若い娘だったことを知り、私の記憶と結びついた偶然の不思議さを感じた。

私たちの間に結婚の意志が固まり始めて、将来の生活問題が真剣に語られるようになると、私はある後ろめたさを彼女におぼえねばならなかった。それまで私は自分の将来の生活設計というものを充分に考えたことがなかった。ある

ものは青春の空想めいた激情と、自己放棄のような生活だった。同じ年令の理容従業員なら、とうに考え実行している独立の意志と、それに見合う地道な貯蓄計画を、私は若さを押し殺した分別臭さ故に軽蔑していた。

私は結婚によつてどうにもならぬその生活から抜けだすことを決意した。そして私は彼女が同じ職業人として私を軽蔑しても仕方ないと思つた。

私は手紙でそのことを打ちあげた。彼女は返事の手紙の中で、

— ただ雨露をしのぐ屋根の下に住めれば、私はそれで幸せです —  
— こういわれてみて、私は密かな感謝と共に我身をかえりみて、強い反省と自己嫌悪にかられた。

私が知つた彼女は、貧しさと住み込みという絶えず自分を押さえねばならぬ生活によつて、世間の若い娘のもつ華やかな物質生活への夢想よりも、貧しくとも精神的な平和でつましい生活を望んでいた。

現在のアパートに落ち着いて、つましいながら新婚らしい明るさと、華やいだ毎日の生活が送られたが、それは決して私が望んだものとは思えなかつた。

新婚早々から経済的にぎりぎりに切りつめ、共稼ぎのため洗濯とか繕いものは夜更けにやった。寝静まったアパートの洗濯場から水音が遠く響くのを部屋で聞きながら、私は独立資金や利殖の研究をしていた。

そんな私たちが最も落ち着いて語り合える時は日曜日の夜だった。その日は朝八時から夜の九時まで、食事以外は立ちっぱなしと行ってよかった。アパートに帰って銭湯にゆき、湯上りの身体を床に横たえるのは十二時を過ぎていた。けだるい疲労と眠む気を押さえながら、快い仕事の後の満足感と明日が休日という安らいだ気持ちの中に、始めて夫婦らしい語らいに浸れるのだった。まるで現実性の薄い未来の夢想や、またこまごましたその日の出来事など、いつまでも飽かずに話し合った。そんな夜はしみじみ語り合ううち、自然と妻への愛情が燃え上がり、激しい愛撫を交わすこともあった。そして疲れ果て、そのまます翌日の正午近くまで目覚めることがなかった。

次の週から休日には、私一人でアパートを探した。とにかく手術までには見

付けねばならなかった。そうしなければ落ち着いて入院できそうもなかった。その間、私は種々の医学書を本屋で立ち読みしたり、古い家庭医学の本を調べた。この卵巣膿腫のはつきりした原因はまだよく分かっていないらしかった。気付かずに放置しておく、ガンに変化する恐れがあるという文章はショックだった。手術は簡単だとかいてあるが、私にはかえってそれが気にかかった。その日もアパートは見付からなかった。不動産屋の狭苦しい部屋で、ストーブの前にやや固くなり借り手の条件をのべるのが苦痛になってきた。もうまる暗記している条件。六畳でガス水道が室内。家賃はこの程度。勤め先から歩いて何分以内のアパート。ここまではよかった。

不動産屋が書類綴りを調べている間、私は次のことをいおうかいいうまいか迷っていた。「将来子供ができてよいという条件がほしいのです」返事はおよそ決まっていた。気の毒そうにこの位の家賃でそういうアパートは中々ないので、あっても空かないのですよ。それから投げやりのように、もしかしたらここがあるかもしれません。当たってみて下さい。地図を書きながら渡してく

れる。私はドアを静かに押し、冷たい北風の中にでた。ポケットの中で固くその紙を握りつぶした。

こうしたある日、裏通りのさびれた不動産屋で、あるアパートに案内された。

「古い家ですけど濡れ縁と庭があります」

不動産屋の女はいった。

「昔の建て方ですから畳も大き目ですし、押入れも一間あります」

その言葉は私の心に暖かな灯をともした。四畳半きつちりの今の部屋では、多くの書籍は押入れ深くしまっておくより仕方なかった。せめて読みたい時、すぐ取りだせるように書籍を手元に置きたい。私のささやかな願いだった。

私は妻と連れ立ってぬかるんだ霜どけ道をたどった。今は見かけることができない灰色の倉庫のような外装の建物だった。破目や壁は長い年月の生活の垢をつけて黒ずんでいた。空いている部屋は入口に近いとつつきにあった。畳には家具の跡がくつきりつき、ぶかぶかして汚らしかった。

「お入りになることが決まりましたら唐紙と畳表を取り替えてもらうように



交渉しますから」

濡れ縁とは、やや腐りかかったような三十糎ほどの幅の板が東側に突きでて  
いるのである。その前は四坪ほどの庭になっていて隣家に接していた。

私は妻を振り返った。妻は案外失望した様子を見せなかった。

私が意見をうながすと

「広くていいわね」とうなずいた。

水道と便所は共同だった。廊下にでると静まり返った日中の建物の内部は異  
臭がした。

帰り道に妻は疲れたように道端に立ちどまった、顔色が心持ち青いように思  
えた。アパートに帰りつき部屋に入ると、そのまま私たちはぐったり畳の上に  
寝ころがった。

「疲れたわ。お茶でも飲む」

「いや、いいよ。それよりもお腹の具合はどう？」

「別に痛みはないわ。でも何かつかれ易いようよ」

今までに気付かずにした腫瘍が意識しはじめた気持ちの上で重荷になってきたのだろうか。

「あの部屋のこと、どうするの。まだ話し合っていないのに」

「そうだった。俺は部屋そのものは気に入った」

「赤ん坊がいいのなら、私も結構だわ」

何気ないその一言が思わず私の心に突きささった。まだ生まれてもいない、まだ生まれるかどうかどうかも分からない胎児さえ、すでに他人から拒まれているのだ。私は怒りにかられた。それは私自身の独立できぬ男としてのふがいなさに、他者と自己への双刃（そうじん）の剣のように燃えた。私はやっと心を押さえた。

「とにかく家主に会ってみよう。それからの話だ」

不動産屋に連絡して、翌日指定された時間に家主を訪れた。私はその家の前に立った時、その大きな門構えと、通された応接間までの幾部屋もつづく間取りの広さに、何か劣等感と屈辱の苛立たしさに心を乱された。

応接間の老婦人の前には、大きな粒のそろったミカンがつやつや光っていた。やせて小柄ながらきちんと正座した老婦人には威厳が具わっていた。不動産屋と話し合う老婦人は七人の子供を育て上げたと自慢そうに話した。

「お入りになるのでした、唐紙と畳を張り替えさせますから、いつでも結構ですよ」

にこにこする老婦人に、私はこのところ忘れていた幸福感を覚えた。

「経師（きょうじ）屋さんはすぐ来てくれないでしょうからなるべく早く連絡して」

てきぱき必要な問題を話した。それからアパートの共稼ぎの若夫婦や、近いうち結婚する独身男や、四十過まで子供のいない夫婦の噂話をした。以前住んでいた赤ん坊のある共稼ぎの夫は、毎朝出勤前におむつを洗ってでてゆく。こんなエピソードを話した。

私は引越しの手順などを考えながら立ち上がろうとしたが、ふと確かめるように赤ん坊について尋ねた。すると老婦人は初耳といった様子だったが、アパ

トの皆さんはどうでしょうかといった表現をした。不動産屋は強調するよう  
にいった。

「まだお子さんがいるのではないのですよ。これからできたらという話なの  
ですよ」

老婦人はただ微笑して

「皆さんが何というか聞いておきましょう。こういうことは後で面倒が起き  
るといけないから、入る前に皆さんの意見を……」

私は帰途、不動産屋と話し合いながら見送りに玄関の式台に手をついて、丁  
寧に挨拶した老婦人を思いだした。

翌日、不動産屋に電話すると、父親が昨日の部屋は駄目だと憤慨した口調で  
なった。

「じゃあ、今住んでいる若夫婦に子供ができたらでてくれっていうのか。も  
う一人だつて近いうちに結婚するっているんだらう。話が分からねえ。あんた  
黙って入っちゃまうんだ。三月だつて、まだ目立たねえんだらう。馬鹿正直すぎ

るよ」

その夜、アパートに帰ると酒をのんだ。酔うと妻にいった。

「あの日、俺が赤ん坊のことをきいた時、もう気持ちは変わっていたんだ。皆さんの意見を聞いてだって。笑わせやがら、年寄りの事を荒立てない分別つてものか。誰が、家主が借家人に一々意見をきくものか」

私の声が高くなり廊下から隣室に響くのが分かった。私は妻にたしなめられながら、なお荒れた。

「糞婆ア！糞婆ア！」

あげくの果て、政府の住宅政策の無能さと、総理大臣をののしった。

「縁がないのよ。よい部屋だったけど、このアパートから方角が鬼門にあたるわ」

妻らしい知恵だった。私はそのまま前後不覚に酔いつぶれてしまった。

その月のN産院の診察日には私も付き添った。実はその朝、私が一緒に病院に行きたくない意志を告げると、妻は涙ぐんで私が行かなければ診察をうけな

いとい張った。仕方なしについてきたが、私はこの病院のもつ匂いの総てが嫌やだった。

「どうせ手術しなければならぬのなら、早くやった方がいいわ」妻は明るく気軽にいうのだが、それが偽りであることは私にも分かっていた。この時、私には何とか胎児を助けなければならぬということより、妻だけは無事であったほしいという願いに強くかられた。

十分程して、診察室をでてきた妻の表情は心持ち明るかった。入口に向かつて歩きながら妻はいった。

「決めちゃった。来週の金曜日。いよいよね」

帰途、私たちは途中のデパートで昼食をとった。これまで入ったことのない味の名店街の高い料理を食べる気になったのは、手術日の決まった心の安らぎかもしれない。 「いつこの店で食べさせてくれるのかなあと、長い間心待ちにしていたのよ」

「いずれ痛い思いをするんで、可哀想だからな」

食後屋上にでると、片隅の陽だまりに二、三の人影をみるほか、ただ早春の風だけが流れていた。頬を風になぶらせて金網越しに地上を見下ろすと、夥ただしい生命の無差別な流れと集散と静止があった。そのエネルギーはこの場所からまるで無力に見え、私自身と切り離れた個別の存在としてそこに見えるのである。考えてみればその一つ一つの生命に各々の意思があり、お互いに交差し切り結び火花を散らしているはずだった。だが、私には人間的な何物をも見えず感ずることもなかった。

私はふとこれまで私を捕まえてきたさまざまの想念が、何の意味も持たない架空なものに思えてきたのだった。

「おい、俺たちの心配なんてほんの取り越し苦労かもしれないな」

「本当ね。なるようになるわ。今のアパートで子供を生んだっていいじゃないの」

「そうだ。誰にだって赤ん坊を生む権利はある」

私は怒ったような声で強くいった。

その年は例年にならない厳しい寒さがいつでもつづいた。アパートから店まで通う道筋が長く辛く思われた。夜の九時過ぎになると、軀を寄せ合つて歩いてても夜風が冷たく靴先まで浸した。

幾日かして寒さが急にやわらいで、春の訪れを告げるような暖かな日だった。店で仕事をしていると、近くの買い物から帰った妻がいつにない笑顔で私に合図するのだった。その客を仕上げて店の片隅できくと、今日買物がてらに寄つた不動産屋で、近所のもともよいアパートを紹介されたというのである。

「見ていらつしやい。ホテルみたいよ」

「子供のとききいたかい」

妻はきいていなかった。私はまた気が重くなつたが、丁度店が暇になつたのでマスターに断り、そのアパートを見にいった。

その近代的なアパートは、二階だけ五室ばかりの小規模な作りで階下に家主が住んでいた。案内の主婦が真つ暗な部屋の雨戸を開けると、南向きの窓いっ



ぱいの明るい早春の光に思わず目がくらんだ。

家賃やその他の条件をきいているうち、私はやはり赤ん坊のことは黙っていた方がよいという気持ちになっていた。

店に帰るまで私は目まぐるしく頭を回転させながらせかせか歩いた。私の心は決まった。思い切つて引越そうと思つた。

金、金、と心で叫んだ。予期していた権利金、敷金、礼金、前払いの家賃、それに引越しの運送費、私は乏しい貯金の額を頭で計算した。また別の気がかりがあつた。現在のアパートを借りる時、契約書に「引越しの折は日割り計算いたしません」その時はこの字句を何気なく認めてしまった。運の悪いことに今月は明日一日しか残っていない。私は今夜帰つて引越しの荷造りを終え明日中に越すことはとても不可能だと思つた。独身ならともかく、新婚とはいえかたりの荷物があつた。それに私の書籍の整理も大変だつた。店のマスターに相談するとすぐこういつてくれた。

「費用の足りない分は月給を前払いにしてもいい。明日一日は特別に休みに

してあげよう」

その夜、アパートに帰るとすぐに荷造りにかかった。妻を働かせるのは気がかりだったが、この場合どうしようもなかった。妻はかいがいしく手ぬぐいで頭を包むと、こわれ物などを新聞紙に包みこんだ。押入れから袋戸棚からあきれるほど雑多な荷物が現れた。部屋一面から廊下まで荷包みで覆われ、私たちはその上を踏んで歩いた。

八分通り整理が終ると、ぐったりとして荷物の上に伸びてしまった。その上を月が冷たく照らしていた。妻は蒲団包みに寄りかかってうたたねをしていた。私は妻のストラックスに包まれた腹部に、私たちの胎児と腫瘍が共に息づき育っているのかと思うと微かな戦慄におそわれた。

翌日は早朝から雨がふっていた。パンと牛乳の朝食をとり、私は妻を残して雨の中にでた。

出勤してマスターから前借の金を受けとり、銀行で預金を下ろして不動産屋に駆けつけた。カーテンのかかった事務室には誰もいず、私の声だけがうつろ

に響いた。私はドアを押して室内に入り、雨だれの音を聞きながら待った。昨日から絶え間ない気持ちと躰の変転の静止の一刻だった。

「昨日あれから連絡しておきました。いつ入ってもいいそうですよ」

その女社長は中年太りで、金歯を光らせながらつぶれたような声でいった。私は金を渡して契約書を作成してもらった。女社長は無造作に私の金を金庫に放りこんだ。

運送屋は十時の予約だった。私は冷雨の町を中を歩いていった。私の足は長靴を通して冷たかった。

運送屋の親父は店の客で知り合いだった。狭い事務所で石油ストーブに当たりながらトラックの帰るのを待った。

「十時までに帰るはずなのに、どうしたのかなあ」

かれは黒板と時計を見上げながらいった。もう一台車庫にある車にはシートがなかった。天候がよければこの車で間に合うのだから、私は苛立たしく落ち着かない気持ちを、だされたココアの甘さの中に押し包もうと焦らだった。

雨はますます激しく降りつづけた。私はアパートに火の気一つない部屋に、ぼつんと私の帰りを待ちわびている妻を思った。

その時やつと帰着した小型トラックに乗ると、私たちはしのつく雨の路上をアパートに向かった。車が止まると真っ先にとびだし、階段を駆け上がり部屋のドアを開けると、妻は部屋いっぱい埋め尽くした荷物の上にぼんやりしていた。私の姿を認めるとさつと喜びを顔に浮かべて

「余り遅いから断られたのかと思った。」

「入るのはいつでもかまわないさうだ。例の話はどうしてもできなかつたよ」  
「その時はその時で改めて考えればいいわ」

「さうだ。なるようになるより仕方ないさ」

私は自分たちの生活が、個人の意志や努力よりも、もっと強く比重のある他人の意志によつてこう簡単に動かされることに怒りを覚えた。

新しいアパートの部屋は思ったより暖かで静かだった。時折、裏から郊外電車の音が響いてくるが、さして気にもならなかつた。窓は東南に開いて階下の

家主の庭が見渡せた。ブロック塀に添って松や椿の常緑樹が黒々と茂り、その内側に霜枯れて骨ばかりになった灌木がそこかしこ群落していた。

建築家という家主の話では、この庭は四季花を絶やさないようになっていくという。妻はそれを楽しみにして、これから梅が咲くというが梅の木は見当たらなかった。

私たちの部屋は丁度庭の真上にあつて、どこでどんな花が咲いたとしても、眺める位置としては最高であろうと思つた。

「まるで私たちの庭みたい。そう思つていればいいのね」

「そうだ。人に手入れしてもらつてね」

私たちは窓に寄りかかつて密かに笑つた。窓の外を冷たい風がさつと過ぎると、微かなざわめきが庭から二階に聞こえた。

幾日かしたある朝、出勤前の僅かな時間に庭を見下ろしているとふと門柱の横に梅の古木があるのに気付いた。枝には蕾がふつくらしていた。今までその下を潜（くぐ）りながら不思議にも気付かなかつた。

入院の予定日になると、わたしは妻と共に入院に必要な衣類や洗面具の入った大きな風呂敷包を病院まで運んだ。

病院は白塗りの壁の厚い戦前から持ち越してきた古い建物だった。ベッドは四つ入っていた。こうした場所に慣れていない私は多少薄気味悪かった。心細そうな妻の表情に、これから何週間というもの、結婚以来始めて別々の生活が営まれるのを改めて感じた。

私は元気づけたり慰めたりする言葉は何故か一言もなかった。ベッドの下に風呂敷包みを押しこんで

「じゃ帰るよ。手術日にはまたくるからね」

それだけというどアを押し廊下にてだ。長く薄暗い廊下は冷々として戸外の寒さが分かった。私は足早にスリッパを鳴らして真直ぐ帰った。

朝、床の中で目覚めると、明け方の冷えこみが暗い屋内を満たしていた。起き上がり雨戸を開けると、ぱつと窓外一面の真っ白な雪景色に目がくらんだ。私の眼下には昨日までの冬空の下に、小さく可憐な蕾をつけていた。寒梅が、

今は枝という枝が真つ白な腕を四方に突き出して、雪に身を任せていた。

その時、切れはじめた雲間から陽光がキラキラした光を下界になげかけてきた。しばらくして風が枝をふるわせて過ぎ、雪塊がぱさりと落ちると、その後から雪片（せつぺん）が細かに光りながら散り落ちた。

私の目にはその黒々と露出した枝に、小さく点々と雪とまぎらわしく寒梅の花が咲いているのが見えた。雪に包まれても寒梅の花は形を失わずに咲けるものなのだろうか？それとも私の目の錯覚なのだろうか。私は躰が冷えきっているのに気付いた。

妻が入院して三日目に私は病院に行った。種々の予備検査では身体に異常なく、手術は一時から始まる予定だった。ベッドの上に起き上がって私を迎える妻の表情には、手術前の緊張の固さはなかった。私たちは余り言葉を交わさなかった。

「庭の梅の花がとうとう咲いたよ」

「本当、雪が降っても」

「本当だとも、見れなくて残念だろうけど、白い小さいきれいな花だ」

妻はベッドの上で想像するようにうっとり目を閉じた。やがて看護婦に呼ばれて妻が準備室に去ると、私は一人で病室に取り残されたような気がした。同室の三人の夫人患者は物音一つたてずひっそりと寝ていた。私は退屈して立ち上がると窓の外を眺めた。というより不安でじっとしていられなかったのかもしれない。

冬空はスूपのようにどんより曇っていたが、戸外は思ったより明るかった。私の手が何気なくポケットに触れると固い感触を感じた。取りだすと今朝出掛けにもってきた文庫本だった。私は気持ちを落ち着けようと椅子に腰を下ろしてページを開いた。

私はただ、本の活字を視線で流しているにすぎない自分を発見した。部屋は物音一つ聞こえず何物も変わらなかった。異常に長い時間だった。その時、私



はある予感に打たれ慄然（りつぜん）とした。ドアを開けて廊下にでた。手術室はどこにあるのか分からなかった。私は再び病室に入った。私は空いたベッドの柵を両手で握り締めるとその上に顔を伏せた。私は何物かに祈っている自分に気付いた。

ドアが不意に開いた。振り返る間もなく看護婦が移動寝台を押しこんできた。私ははっとして、その上に捨てられたように横たわっている妻の顔に視線を当てた。見慣れぬほど蒼白い顔はまだ麻酔から覚めていなかった。

二人の看護婦が横抱きにしてベッドに移した。鉄製の柵を妻の身体の上にかかけ、その上に蒲団をのせた。私は茫然と傍に突っ立ったまま見下ろしていた。その時私は医務室に呼ばれた。医師らしい男が私に背を向けて机に向かっていた。

「何か用ですか？」

彼は首だけねじ曲げて不気味な声でいった。後から入ってきた看護婦が、今手術した患者の御主人ですというのと、

「ああ、それは失礼」

意志はくるりと椅子を回転させて私に向き直った。

「早く手術してよかった。かなり悪化していましたね。もっと遅れると危険な状態になるところでした。」

テーブルの上には大きな夏ミカンほどのビニール袋があり、茶色い液体に満ちていた。その隣の小瓶には切り取った腫瘍らしい肉片が入っていた。看護婦が言葉をついていった。

「本当ですよ。茶色っぽいのと、どす黒いのと、何かどろどろしたものがお腹いっぱい、このビニール袋の二倍位あったのですよそれを取るのに時間がかかって苦労しました」

医師はその液体が何であるか、どうした原因でできたか、これから試験してみるのがといった。

「今後、病状に急な変化がなければ心配ありません。妊娠しているので麻酔も半分しか使用できないし、手術にも神経を使いましたが、赤ちゃんは大丈夫

だと思いません」

医師はそれだけいうと、忙しそうに机上のカルテにペンを走らせた。私はまだその場に立っていた。看護婦が事務的な声で、まだ何か用があるのかと尋ねた。

私は医師の説明に不満だった。たとえその手術の結果がどんな状態を生み出したとしても、私には真実をいってほしいと思った。

「先生」

私は医師の背に向かっていった。

「妻の病状は特殊な膿腫だったと考えてよいのでしょうか。で、これからの回復は長びく覚悟が必要なのですか？」

医師はまた椅子を回転させて私に向かい合った。先刻より引き締まった顔付きになっていた。

「それは何ともいえません。一週間待って下さい。手術後の回復状態と、試験の結果を合わせた上で判断したいと思います。」「なあに私の経験では心配

することなんかないですよ」

医師は始めて笑った。それは丁度、いつも患者を勇気づけているような慣れきった笑いだった。

私が病室に戻ると、妻は麻酔からまだ醒めていなかった。私はベッドの傍らに椅子を寄せて座った。

私にはこの経験がどういう現実なのかとつきに理解できなかった。私は自分の体が少しずつ熱くなるのが分かった。今の私はただ妻の覚醒を待つだけのことはあるが、ふと妻はこのまま目覚めることがないのではないか、その後の孤独を想像しようとする誘惑に押し負けていた。それは私の心の奥深く潜むベシミズムによるものかもしれない。シミズムによるものかもしれない。

人はこうした場合、その結果がどんな状態で現れるにしても、必ず心の片隅で自分の真の願望が満たされることを信じ夢みるものだが、私は現在、何を願っているのか自分でもそれが分からなかった。

私は妻の腹腔からでたどろどろした液体を思いだした。私はふとそれをもた

らした責任が総て私にあるように思えた。私の心のどろどろした澱みを、妻が代わって手術によって掻きだしてくれたのではないか。私は下腹部にありありと痛覚を感じた。私と結ばれたことによつて、私と運命を共にしなければならぬ妻に、私は何を与えてきただろうか。少なくともこれからの私の生活は、もつと充実した力強いものでなければならぬ。戦いは避けようとしても、決して逃れることができないのなら、むしろその戦いを己の運命として耐えていかねばならぬ。錯綜したさまざまな想念が頭を駆けめぐりやがて私は深い疲労をおぼえた。

室内は何かわることなく、明るく光に満たされていた。

しばらくして私はどことなく密かなすすり泣きを聞いた。私が顔を上げると能面のように表情のない顔でよこたわっている妻の唇からその声はもれていた。

私は思いがけない感動に襲われた。私は妻の目に涙があふれ、すいと耳に向かつて吸いこまれるのをみると、ハンケチをだして静かにその涙をぬぐった。

歩む人 1966. 1

No. 1 創刊号 理容文芸協会発行

昭和四十一年一月十五日発行（年四回発行）

編集人 大久保 勝義

発行人 安田 銀次郎

発行所 東京都新宿区柏木938